

## 平和の子がそこにいるなら

越川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

荒れ野にいたダビデは、ナバルが羊の毛を刈っていると聞き、十人の従者を送ることにして、彼らにこう言った。「カルメルに上り、ナバルを訪ね、わたしの名によって安否を問い、次のように言うがよい。『あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和がありますように。羊の毛を刈っておられると聞きました。あなたの牧童は我々のもとにいましたが、彼らを侮辱したことはありません。彼らがカルメルに滞在していた間、無くなったものは何もないはずで。あなたの従者に尋ねてくだされば、そう答えるでしょう。わたしの従者が御厚意にあずかれますように。この祝いの日に来たのですから、お手もとにあるものを僕たちと、あなたの子ダビデにお分けください。』」ダビデの従者は到着すると、教えられたとおりダビデの名によってナバルに告げ、答えを待った。ナバルはダビデの部下に答えて言った。「ダビデとは何者だ、エッサイの子とは何者だ。最近、主人のもとを逃げ出す奴隷が多くなった。わたしのパン、わたしの水、それに毛を刈る者にと準備した肉を取って素性の知れぬ者に与えろというのか。」

(サムエル記上 25 章4—11 節)

その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。

(ルカによる福音書 10 章1—6節)

### ダビデの挨拶

司式の方に読んでいただいたように、「あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和があるように」という聖書の言葉が今学期の統一テーマとして選ばれています。今回の聖句は私が提案したものを採用していただいたのですが、これだけを取り上げると、昨今の大きな問題である「平和」を訴える言葉としてけっこう「イイ感じ」がします。しかしながら、実はこのセリフが出てくる前後の物語、サムエル記のこの部分を読んでいくと、なかなか意味深長で危ないセリフのようにも受け取れるのです。

ここに登場するダビデは、後にユダヤ人が作った王国の事実上の初代の王となった人物です。今日の箇所は彼がまだ王になる前の権力闘争の時代のエピソードで、ナバルという裕福な男とその妻アビゲイルという女性が登場します。物語はダビデがナバルに人を遣わし、自分と彼の部下たちのために、食料

や水を要求することから始まります。このとき、ダビデは彼が遣わした従者たちを通して、「あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和があるように」と挨拶させたというのです。

しかし、ナバルは「ダビデとは何者だ」とうそぶき、「わたしのパン、わたしの水、それに毛を刈る者にと準備した肉を取って素性の知れぬ者に与えろというのか」と言って、ダビデの要求を拒絶します。

この後の物語を続けて読んでいくと、ナバルの拒絶を聞いたダビデは自分が侮辱されたと感じ、四百人の部下たちを武装させ、ナバルとその仲間の男たちを皆殺しにするために出発するのです。これを察知したナバルの妻アビガイルは独断でダビデのもとに行って食料を贈り、あくまでも下手に出て言い訳します。その結果、ダビデは決意を翻し、なんとかその場はおさまりました。物語はさらに続き、結局、ナバルは死に、アビガイルはダビデの妻のひとりになったというところで終わります。

聖書の物語はダビデを主人公としており、どうしてもダビデは善玉、ナバルは悪役という書き方になるのですが、この物語を読んでいてどうも気分が良くありませんでした。ダビデは自分の部下と武力を背景にして、もともと関わりのなかったナバルに対して一方的に食料や水を要求しているわけで、それが拒絶され侮辱されるとたちまち力に訴えようとします。アビガイルはことを未然に防いだ賢い女性ということになっていますが、結局、ダビデの思わく通りに事態は決着したことになります。ダビデは力尽くで目的を達したわけで、そうだとすれば、最初の挨拶の中で従者に「あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和があるように」と言わせたのはどういう含みがあったのか、詮索したくもなるのです。

### 力による平和？

現在も続いているウクライナとロシアの間の戦争もそうですが、歴史は往々にして、戦争を仕掛ける側、侵略する側、力行使する側が、「平和のために」という名目で戦いを始める事実があることを教えています。戦いが自分たちにとって都合のいい平和や自分たちの要求を達成するための手段とされ、それに従わない相手は敵とみなされ、ついには自分たちの平和を阻害するものと決めつけられることになります。その場合、自分たちの側から見れば、相手は皆、悪者であり、「頑固で行状が悪い」（サムエル記上 25 章 3 節）人間に見えたり、「ならず者」や「愚か者」（同 25 章 25 節）に見える、あるいはそのようにレッテルを貼るということも起こるのです。

そのような状況の下で、相手に対して「あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和があるように」と告げるのはどういう意味があるのでしょうか。もしかするとこの言葉の背後には、「お前が平和を望むなら、まず最初に私たちの言いなりになれ、私たちの要求を呑め、私たちに従え」という脅し、恫喝に通じるものが隠されていたのかも知れないと想像するのは考えすぎでしょうか。

ダビデは聖書の中で最も有名で人気のある人物のひとりであり、ユダヤ人の歴史における黄金時代を築いた王様です。しかし露骨に言えば力尽くで権力の座に上り詰めた人間であり、戦いに明け暮れた人間というのが、その本質だったことは否めません。そんなダビデが「平和」という言葉を口にするとき、そこには権力と武力に頼らざるを得なかった人間たちすべてに共有するであろう、ある種の嘘くさい感じ、言葉を弄ぶような感覚、さらにはなんとなくニヒスティックな雰囲気すら、私には感じられるのです。

### 「平和の子がそこにいるなら」

今日は聖書からもう一カ所読んでいただきました。こちらでは、イエス・キリストが弟子を派遣する場面が出てきます。ダビデの物語と構図が少し似ていますが、その背景や力関係はまったく異なっています。イエスのもとから弟子たちが派遣されるのは、「狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」（ルカによる福音書 10 章3節）といひます。「財布も袋も履き物も持って行くな」といひのですが、もともと彼らにはそういう財産や所有物もなければ、身を守る武器もなかったといひことでしょう。「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言ひなさい」（同 10 章5節）とも記されています。無一物で無力なイエスの弟子たちを、なぜか受け容れてくれる家があるならば、そこで「平和があるように」と告げなさいといひのです。面白いなと思ひのは、その次に出てくる言葉です。

「平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願ひ平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。」（同 10 章6節）

「平和の子」といひのはどんな「子」、どんな「人」なのでしょう。よくわかりません。いずれにしても、相手から「平和がありますように」と挨拶されたとき、それを無視したり反発する人のことではないでしょう。ナバルがダビデに向かって言っただやうな、相手を侮辱したり拒絶する人のことではないはずだす。

平和といひのは本質的に「関係」に関わることがらだす。その関係とは、言ひまでもなく「対立」や「争い」の関係ではなく、また「強いものと弱いもの」の関係とか「上と下」の関係とも異なるはずだす。どちらか一方が相手を追ひ詰め圧倒して打ち立てる関係を平和とは呼びません。あるいは自分一人だけが勝ち残って、もはや誰もいなくなった状態を平和とは言ひないでしょう。

イエスの言葉の中に「狼と小羊」といひの比喩がありましたが、平和にも「狼的なイメージの平和」もあれば、「小羊が象徴するやうな平和」もあるとええるかも知れませんが、ダビデが「狼的なイメージの平和」を象徴すると言ひきっていいかどうかわかりませんが、少なくとも剣や暴力に訴えようとする彼の姿を思ひ浮かべると「小羊的な平和」のイメージの人とは思ひません。

ご承知の方もいるかも知れませんが、「小羊」といひのイメージは、キリスト教会の伝統では、イエス・キリストその人を指し示すものとして使われてきました。それはユダヤ教の礼拝において、人間の罪の身代わりとなり、犠牲として献げられる小羊のイメージだす。ですから、イエス・キリストを象徴する小羊の姿は、つねに傷ついて血を流す小羊の姿で描かれるのが特徴とされてきたのだす。

エフェソの信徒への手紙の中に、「実に、キリストはわたしたちの平和であります」（2章 14 節）といひ言葉が出てきますが、キリストが十字架において血を流して死んだのは、私たちすべての人間の罪の身代わりとなったといひことであり、その犠牲によって人と人との間に新しい真の平和が打ち立てられたといひことを、この聖書の言葉は語っているのだす。

### 平和と愛

平和といひのイメージは、安心できる関係、平等な関係、多様な人々がお互いに認め合っている関係であると思ひます。そしてそれはとてもデリケートで、壊れやすく、移ろいやすいものなので、つねにお互いに配慮し合っ、形作っ、いかなければならない関係なのだろうと思ひます。

ヨハネによる福音書の中でイエス・キリストは「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合ひな

さい」(15章12節)と語っています。詰まるところ平和とは互いに愛し合う関係に極まるのであり、その意味で「平和の子」とは「愛の子」「愛に生きる者」ということであると言っていいと思います。愛もまた私たち人間の「関係」を表す言葉であり、私たちの「生き方」を言い表す言葉です。

あなたが平和の挨拶を告げるとき、そこに平和の子がいるなら、平和はそこにとどまる。

あなたが愛を告げるとき、そこに愛に生きる者がいるなら、愛はそこにとどまる。

平和と愛を告げる者となること、告げられた平和と愛を受け容れ、共に平和と愛に生きることを志すこと。まさしくそうした関係を志す人々の間でこそ、「あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和があるように」という言葉は、真に生き生きと明るく輝く言葉となるのだと思います。

2023年9月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録